

「生活作文の書き方教室」掲載作文使用条件

① 「生活作文の書き方教室」（以下「本サイト」）掲載作文の著作権は放棄しておりません。使用条件に同意した場合にのみ使用できます。

② 本サイトの作文は、学校（小学校および中学校）提出に限りその使用を認めます。

③ 本サイトの作文を使用し、何らかの問題が発生しても、本サイトおよび管理人は一切の責任を負わないものとし、すべて使用者の自己責任で対応するものとします。

④ 本サイトおよび作文に関しては、苦情とうは一切受け付けません。

⑤ 何かしらの問題が発生する可能性がある場合、判断した場合、使用は中止してください。

⑥ 本サイトの作文を他サイトへ転載することは厳禁です。

⑦ 本サイト掲載作文への直リンクは厳禁です。

以上

射的

五年二組

●●●●

●●祭りに、父と出掛けました。

お祭りの会場に着くと、ソースが焼けるに

おいがしました。このにおいをかぐと、お祭

りに来た気分になります。幼稚園に入園する

前、母が焼きそばを作ってくると、ソース

の焼けるにおいに「お祭りだ。お祭りだ」と

言って、騒いでいたそうです。

わたしはお祭りが大好きです。たくさんの

人が集まっているだけで、何かが起こりそう

な予感がします。それに、露店で買う食べ物

がすごくおいしいんです。お好み焼きもたこ

焼きも、それに焼きそばも、普段食べるそれ

とはおいしさが全然違います。

リンゴあめにソースせんべい、お祭りです

か食べられないものが露店を飾ります。それ

らを買ってもらうのも、お祭りの楽しみです。

でも、お祭りでは一番好きなのは、射的です。

射的に初めて挑戦したのは幼稚園の年長のと

きでした。そのときは一つも景品に弾が当たらずに、お店の前で泣いた記憶があります。それ以来毎年お祭りでは射的にチャレンジしました。が、連戦連敗でした。そして去年、初めてキヤラメルを落とすことができました。コルクの弾が当たった瞬間「落ちてっ」と、思わず口にしていました。そして、露店のおじさんからキヤラメルを手渡された瞬間、達成感に包まれました。去年のお祭りのあと、もつとたくさんの景品を落とせるようになりたいと思いました。インターネットで、射的のグッズを調べました。「射的はほしいものを狙ってはいけません。取れるものを狙え」とか、「軽いものを狙え」とか、「鉄砲の音にだまされるな」とか、射的のワザに関するあれこれを収集しました。「これだけ研究したのだから、今年は三つは固い」と、根拠はないけど自信たっぷりでした。射的の露店をめざし歩いていました。ひとときわ照明が明るく、たくさんの人が群

がっている露店が目に入りました。そうです、
 そこが射的のお店です。
 はやる気持ちを抑えるように深呼吸をして、
 今まで研究したことを一つ一つ復唱しました。
 露店の前に着くと、景品を一通り見渡しま
 した。ポケットから二百円を取り出し、おじ
 さんからコルクをもらいました。
 コルクを銃の先に詰めました。そして右手
 をいっぱいに伸ばし、景品に狙いを定め、引
 き金を引きました。「ガシヤ」と鉄砲の大き
 な音がしました。景品にコルクが当たりまし
 た。でも景品はびくともしませんが。その景品
 はこの鉄砲とコルクの玉では落とせる重さで
 はないのです。
 射的の鉄砲は大きな音がするので、すごい
 力がある感じがします。しかし、音だけです。
 しかも弾は軽いコルクなので、威力が全然な
 いのです。弾が当たっても倒れない景品は、
 何度挑戦してもだめなのです。
 わたしはほかの景品に狙いを変えました。

「今度こそっ！」と、念じながら引き金を引
 きました。すると、見事に景品が棚から落ち
 ました。「この景品を狙えば、あと三つすべ
 て落とせる」と判断しました。ポン、ポンと
 コルクの弾が発射されるたびに、景品がぽと
 りと棚から落ちました。
 そして最後の一発というときになって、何
 となく周りがざわついていてるのを感じまし
 た。そして視線がわたしに注がれている、そんな
 気もしました。子どもものわたしが三つも続け
 て景品を落とした姿がいつの間にか注目さ
 れていたのです。
 「それならば、勉強したワザを見せてあげま
 しょう」と、確実に落とせる軽い景品めがけ
 て引き金を引きました。これまた棚から落ち
 ました。五発中四発命中。われながらいい成
 績です。
 わたしの腕前に感心したのか、父が「もう
 一度やってみるか」と二百円くれました。そ
 して、露店のおじさんからコルクをもらおうと、

同じ調子で引き金を引きました。コルク弾が命中し、景品が棚から落ちるたびに小さな歓声が起こります。

最後の一発、取れないのを承知でぬいぐるみを狙いました。コルクの弾が当たっても、びくりともしませんでした。すると同時に、大きなため息が流れたあと、拍手が起こりました。子どものわたしが、八個も景品を取ったことへの拍手でした。

大人からの拍手に誇らしい気持ちになりました。一年間、この日のために射的を研究したかいがあったというものです。

帰り道、ビニールの袋に入れてもらった景品を誇らしげに父に見せると、「その情熱の半分も勉強に向けたらどうなんだ」と、あきれ顔で言われました。

しかし、その言葉はわたしの耳には入りませんでした。「来年はパーフェクトだ！」、そう決心して、祭り会場の雑踏を背に、家路につきましました。